

黙示録7章「神の守りと救い」

1A 神の僕たちの印 1-8

1B 災害を押しとどめる天使たち 1-3

2B イスラエル十二部族 4-8

2A 大患難から抜け出た人たち 9-17

1B 救いを喜ぶ大群衆 9-12

2B 神の前にいる慰め 13-17

本文

黙示録7章を開いてください。私たちは、6章から患難の時代に入っています。永遠の神の御座があり、そこに小羊が近づいて来て、七つの封印を受け取られました。そのことで、世界を贖うため、この世を支配している悪魔から奪還し、神の国を立てます。そして私たちは、その封印の六つを小羊が解かれたところを読みました。初めの四つは、四頭の馬です。初めの白い馬は、征服から征服へ、キリストのような救いをもたらすようであり、実はその後続く、戦争、飢饉、そして死をもたらす偽キリストであることが分かりました。そして第五の封印は、祭壇の下にいる魂が叫んでいました。彼らは、患難時代の中にいて、殉教した魂です。彼らは、そのような流血に対して神の正しい裁きが行なわれることを願いました。けれども、このように言い渡されました。「あなたがたと同じもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい。(6:11)」7章は、これらさらに殺されていく人々が、天に入れられていく情景を読んでいきます。

そして第六の封印が解かれると、太陽や月に異変が起こり、天の星も地上に落ち、それから大地震が起こって、それでそこにいる人々が叫びます。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。(6:16-17)」父なる神と小羊の怒りを、彼らは受けています。その方の前には立っていることはできない、耐えられないと叫んでいます。私たちが、怒れる神の前に立つことは、まことの恐ろしいことです。「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。(ヘブル 11:31)」しかし、私たちは7章において、主の前に出て賛美し、感謝している人々の姿を読みます。同じ主の御座であっても、ある人にとっては怒りであり、またある人にとっては喜びなのです。

1A 神の僕たちの印 1-8

1B 災害を押しとどめる天使たち 1-3

1 この後、私は見た。四人の御使いが地の四隅に立って、地の四方の風を強く押え、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた。2 また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神

の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。3「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」

ヨハネは、地上に下る災いの幻を見せられましたが、これらのことが起こっている中で、また別の側面で起こる出来事について、幻を見せられています。四人の御使いがいます。「地の四方の風を堅く押え」しているとありますが、四方という表現は地の全方向、東西南北の全てということです。例えば、預言者エゼキエルはイスラエル全土が荒廃へと向かうことを予見して、「7:2 もう終わりだ。この国の四隅にまで終わりが来た。」と叫びます。今、神の裁きが海や木に対して全土に対して下ろうとしているのですが、それを御使いが引き止めているということです。

このようにして、神がご自分の災いを引き止めるという働きがあります。ロトがソドムを出て行くまでは、主はそこに火を振らせることはありませんでした。また、テサロニケ第二 2 章によれば、不法の人の現れ、つまり反キリストが現れるにも、引き止めるものがあるので、不法の秘密が働いていても現れていないという説明がパウロにありました。これは教会の携挙によって取り除かれますが、教会が神の救いを伝えていて、その働きが終わるまで神はご自分の怒りを地上に現すのを引き止めておられます。今、患難の時代に入り、神は教会ではなく、神の印を押されたしもべたちによって、ご自分の救いを完成されようとしています。その印を押してしまうまで、さらに災害を加えるのを留めておられています。

この四人の御使いは、8 章に現れます。第七の封印を小羊が解かれると、七つのラッパが吹き鳴らされます。そこでは、木の三分の一が焼け、海の三分の一が血となり、地上では川の水が汚染されます。聖書において昔から、東からの風によって、いなごの襲撃がエジプトにあたりと、風によって災いが下りましたが、その風を御使いが引き止めています。私たちは、自分たちが生きている中でも、天候や気候が不順であることに既に気づいています。神は少しずつ、ご自分が将来、何を行われるのか、注意喚起をされているようです。毎日が、比較的安定した天候が与えられているというのは、当たり前のことではなく、神が敢えてそれを行われているのです。それを取り除こうと思えば、いくらでも、今からでもすぐに行なうことができになります。「今、起こっていないのは神の憐れみがあるからだ。」ということを知る必要があるでしょう。

そして、この四つの御使いは異なる別の、力ある御使いが日の上るところから出て来ています。なぜ、「日の出るほう」という方角、つまり東からであります。黙示録の中にも、東のほうからやって来る御使いの活動が記されています。9 章 14 節で、ユーフラテス川のほとりに四人の御使いがつながられていることが書かれていますし、16 章に同じくユーフラテス川に鉢を御使いがぶちまけて、それで日の出るほうから全世界の王たちがやってくるのが預言されています。これらは災いがやって来る方向なのですが、ここ 7 章では、「ちょっと待て！まだ災いを下してはいけない。」

と待ったをかけて、やめさせている声であります。ちょうど敵に銃口を向けて攻撃をしようとしている部隊に、上司が「やめろ、まだだ！」と止めているような状況でありましょう。

そして、「神のしもべたちに対する印」であります。ここから、黙示録に出て来るテーマの一つである「印」があります。8章において第七の封印が解かれる幻が始まりますが、9章では、いなごのようなものが、さそりの力をもって出てきて、人々が苦しみ悶えるようにさせますが、「額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡された。(4節)」とあります。そして14章において、小羊がシオンの山に下りてこられて、そこで新しい歌を歌っている地上から贖われた神の僕たちの姿が出て来ます。患難時代の初めに、神の印を押されて、それであらゆる害から守られて主の再臨のお姿に見えることができる、選ばれた人々です。その反対に、偽物も出て来ます。獣の国においても刻印があり、その住民は全て右の手か、その額に刻印を受けさせられます。これは獣の名を表す数字であり、六百六十六であるとあります。印を押されていない者は殺されますが、しかし獣の印を持っている者は後に神ご自身によって苦しみに遭います。

印というのは、聖書が書かれていた時代、権威や所有権を持っているしるしとして使われていました。例えば、イスラエルの王アハブの場合、彼がナボテのぶどう畑を欲しがっていたので、妻イゼベルが、王の印で封印をして手紙を書いた、と書かれています(1列王 21:7)。また、新約時代のとき、世界はローマが中心でしたが、世界の貿易もローマが中心でした。東方からローマへの物流はもちろん、らくだなどの動物による運送と、船による運送でしたが、貿易商人が、積み降ろされた貨物が自分のものであると要求するときに、前もってその指輪の印によって、しるしを付けることによって、貨物を受け取りに来ていました。このように、印はその人が所有していることを示すものです。ですから、彼らはこれから神の所有の者として、神の権威を与えられながら生きていくこととなります。

私たちクリスチャンは、このような印を神によって押されています。第二コリントにこうあります。「私たちがあなたがたといっしょにキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。神はまた、確認の印を私たちに押し、保証として、御霊を私たちの心に与えてくださいました。(1:21-22)」キリストにあって、私たちは神に堅く保たれています。私たちが永遠のいのちの約束を受け取るまで、神がキリストにあって、私たちを守ってくださっています。そして、証印を押されているということは、聖なる者とされていることを意味します。「エペソ 4:30 神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」神が同じように私たちを守ってくださいます。そして責任として、私たちは神の悲しまれるものから離れないといけません。

2B イスラエル十二部族 4-8

7:4 それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印

を押されていて、十四万四千人であった。7:5 ユダの部族で印を押された者が一万二千人、ルベンの部族で一万二千人、ガドの部族で一万二千人、7:6 アセルの部族で一万二千人、ナフタリの部族で一万二千人、マナセの部族で一万二千人、7:7 シメオンの部族で一万二千人、レビの部族で一万二千人、イッサカルの部族で一万二千人、7:8 ゼブルンの部族で一万二千人、ヨセフの部族で一万二千人、ベニヤミンの部族で一万二千人、印を押された者がいた。

印を押された神のしもべたちは、「十四万四千人」おり、彼らは、「イスラエルの子孫のあらゆる部族」であります。みなさん、「十四万四千人」について、多くのことを聞くかと思えます。いろいろなキリスト教異端やカルト宗教が、自分たちのグループが十四万四千人であると言っているからです。エホバの証人がその有名なグループの一つです。ここで彼らを反駁しようと、一生懸命、聖書研究書などを使って汗をかかないでください。非常に簡単だからです。「イスラエルの子孫のあらゆる部族」と書いてあるのですから、「イスラエルの子孫のあらゆる部族」なのです。こんな簡単なことはありません。

既にイスラエルの残りの者として、世界に離散しているユダヤ人信者のことをヤコブは、手紙の中で書いていました。「ヤコブ 1:1 神と主イエス・キリストのしもべヤコブが、国外に散っている十二の部族へあいさつを送ります。」そして教会が携挙します。黙示録 4 章と 5 章には、天における光景が書かれていますが、そこに教会の姿が書かれています。イエスが天から下って来られて、私たちが空中にまで引き上げられ、既に教会が天にいて神とキリストをほめたたえているのです。そして神が地上にご自分の怒りを下されるのですが、その時は同時に、イスラエルの救いの初めでもあります。「ローマ 11:25-26 その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれています。救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬度を取り払う。」異邦人の完成があって、その後でイスラエルが救われると書かれています。エレミヤ書には、大患難のことを「ヤコブにとって苦難の時(30:7)」と書かれています。教会が福音をユダヤ人に語っている時は、一部の者たちしか信じません。それでも、ユダヤ人またイスラエル人の中から信仰を持つ人々が増えています。しかし、教会が取り上げられて地上に居なくなる時に、主はイスラエルを取り扱われて、大患難時代に彼らが苦しみを経た後に彼らを救われるという計画を持っておられます。ですから、私たちはエルサレムの平和のために、教会で祈っていますが、それは彼らがこのようにして救われることを願って、今からでも救われるように祈り求めているのです。

十二部族の各部族が、それぞれ一万二千人います。ここで気づくことは、一部族が抜けてしまっていることです。ダン部族がいません。実は、このことは今に始まったことではなく、イスラエル十二部族が始まって以来起こっていることなのです。ヤコブに 12 人の息子が生まれました。その中の一人がヨセフですが、彼は兄たちによってエジプトに売られてしまいました。けれども主が彼とともにおられ、ヨセフはパロの次に権力を持つ支配者となりました。そこで彼は二人の息子を生みま

した。マナセとエフライムです。ヤコブは晩年二人に手を置いて、祝福しました。これは、ヨセフの息子がそのままヤコブの息子としての相続を受けるという意味です。ですから、ヨセフから二部族が出てきました。マナセ族とエフライム族です。ですから、合計すると13部族なのです。

けれども面白いことに、イスラエルの部族がすべて列挙されているときは、必ず12部族だけが列挙されます。そこでどこかの部族が、ここ黙示録7章にあるように省略されているのです。ある時はシメオン族が抜けています(申命記33章)。ここでの目的は、「12」というイスラエル共同体のまとまりを残しておくためです。ここではあたかも、ダン族が退けたらたように見えますが、エゼキエル書48章にはダンへの割り当て地がありますから、彼らは退けられていません。これは、新約聖書の使徒行伝においても同じことが言えます。イスカリオテのユダが自殺した後、ペテロが、くじを引かせて、マッテヤを加えたので使徒が12人になりました。ところが、後にパウロが復活にイエスに会い、それで13人になっています。けれども、十二使徒なのです。このことはおそらく、十二という数字が何らかの意味を持っているからであろうと考えられます。おそらく、この数字は「統治」を表しており、神の統治を象徴しているのではないかと思います。ですから、各部族の人数も、ここでは1万2千人と12の数字であり、1万2千人が12部族あるということで、神が支配されている、しもべたちを強調しています。そして実際に、14万4千人の神のしもべが、大患難時代が始まった時に現われるでしょう。

2A 大患難から抜け出た人たち 9-17

1B 救いを喜ぶ大群衆 9-12

9 その後、私は見た。見よ。あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大ぜいの群衆が、白い衣を着、しゅろの枝を手にとって、御座と小羊との前に立っていた。10 彼らは、大声で叫んで言った。「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」

ヨハネは再び、「私は見た」と言っています。一回目は、地の四隅にいる四人の御使いであり、二回目は、神の印を持っているもうひとりの御使いであり、そして三回目に、これら大ぜいの群衆を見ました。彼らは、「あらゆる国民」であり、あらゆる部族であり、民族であり、国語からの人々を形成しています。バベルの塔において、一つの民で一つの言語であった人間は、ばらばらにされて地に散らばっていき、民族や国々を形成しはじめました。そこで主はアブラハムに対して、「地上のすべての民族は、あなたによって祝福を受ける。(創世12:3)」と約束されました。すべての国民、すべての民族、すべての国語の人々が祝福を受けます。そしてイエスさまは、弟子たちに、「あらゆる国の人々を弟子としなさい。(マタイ28:19)」と命じておられます。主は、このようにあらゆる国民や民族、国語の者たちに強い関心を持っておられて、救うことを願っておられます。「神は、すべての人が救われて、真理を知ることになるのを望んでおられます。(1テモテ2:4)」とあります。

この群衆が誰かと言いますと、14節に出て来ます。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者

たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」とあります。つまり、患難の時代に信仰をもった人々であります。彼らはそのまま殉教する可能性の高い人たちです。おそらくは、先の 14 万 4 千人の神の僕の宣教の働きによって、彼らが信仰を持ったのではないか？と思われる。かつてイスラエル十二部族が、異邦人に対して世界の光となるよう召命を受けていたように、今、その働きを行なっています。ユダヤ人は、アッシリヤとバビロン捕囚、それからローマによるエルサレム破壊によって世界に離散しました。イスラエルが建国しましたが、それでも世界に散っています。そうした彼らは、その国の言葉を語ります。そのまま、贖われたイスラエル人として離散の地で、そこにいる異邦人に福音を語るができるでしょう。

ところで、教会が引き上げられたのに、どうして人々が救われることができるのか？と思われるかもしれません。教会という、ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つからだになるという聖霊の働きは終わりますが、聖霊がそこからおられなくなるということではありません。教会が始まったのは、使徒行伝 2 章にある聖霊降臨であります。その前に、聖霊が働いていなかったでしょうか？いえ、福音書を見ればそこで罪赦され、救われている人々は数多くいます。そのような状態に戻るということです。

そして彼らは、「白い衣を着」て、「しゅろの枝」を手に持っています。白い衣については、後でその意味の説明があります。そして棕櫚の枝は、イエス様がろばの子に乗られて、エルサレムに入ってきたときに、群衆が「ホサナ」と言って出迎えたときに、用いられたものです。ちょうど私たちがこの前、棕櫚の聖日を迎えました。彼らは、「ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。イスラエルの王に。(ヨハネ 12:13)」と言いました。これはメシヤが来られて、自分たちを救ってくださったことを喜びお祝いしているのです。そして、彼らは今、天においてまことの救いを得ることができ、その喜びの中で棕櫚の枝を持っているのです。そして、思い出してください、ソロモンの建てた神殿、またエゼキエルの見た神殿の幻には、ケルビムと棕櫚の木が彫刻されています。ケルビムは、主の御座の前にいる礼拝を導く天使長ですね。そして、棕櫚は小羊による救いを喜び迎える姿であります。

「御座と小羊との前」とあります。彼らは今、天の御座の前にはいるのですが、今、そこに立つことができているのです。思い出してください、地上においては小羊の怒りを見て、もう耐えられない、そこに立つことはできないと嘆いている者たちの姿があります。しかし、彼らは同じ御座なのに、そこに大胆に立つことができ、そして恐怖ではなく、反対に慰めと救いの中で喜んでいいるのです。それは、なぜでしょうか？かつてイスラエル人も、聖なる神がシナイ山に降りてこられたので、恐ろしくて震えていたとあります。しかし、今やキリスト・イエスが流された血潮によって、聖所がきよめられました。もはやそこは、裁きの御座ではなく、恵みの御座になったのです。「ヘブル 4:16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

そして 10 節で、彼らは、救いは神にあり小羊にあると叫んでいます。私たちは、このことにある神の憐れみに感謝しすぎることはありません。今、受難週ですが、主が自分の罪のために行われたこと、このことに触れる時にあまりにも深い、強い愛に心が震えます。自分の罪のために、身代わりにご自身でその身に神の御怒りを受けてくださったのです。使徒パウロは言いました。「1テモテ 1:15「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」

11 御使いたちはみな、御座と長老たちと四つの生き物との回りに立っていたが、彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、12 言った。「アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。」

御座があって、その回りに 24 人の長老たちがいたことを思い出してください。それから、四つの生き物、おそらくケルビムがいましたね。そして、こうありました。「5:11 また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。」今、これだけの大群衆が主に対して救いを喜んでいたので、無数の御使いたちも、神の前にひれ伏して、礼拝しているのです。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、勢い、すべてが神にあります。そして一時的なものではなく、永遠にあります。御使いの関心が、人々の救いにあることがここからわかります。それは彼らが神のしもべであり、神の人の創造、人の墮落、そして人の救いに関心を持っているからです。したがって、私たち教会にどれだけ神が御使いによって関心を持っておられるのか、ということ 생각합니다。

2B 神の前にいる慰め 13-17

13 長老のひとりが私に話しかけて、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか。」と言った。14 そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存じです。」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」

24 人の長老たちの一人が、ヨハネに質問しています。白い衣を着ている人はだれか、という質問です。けれどもこれは、本当は質問ではありません。次の節で、質問しておきながら自分で答えています。ヨハネに、この白い衣を来た、あらゆる国からの、かぞえきれない群衆がだれかに注意を引き寄せるためです。ユダヤ教においては、教師であるラビがこのようにして教えていきます。パウロもラビの一人でありましたから、ローマ書を見ると、「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。」と尋ねて、「絶対にそんなことはありません。」と自ら答えています(6:1)。

先ほど話しましたように、教会が天に引き上げられることによって、神の救いの働きが終わるの

ではありません。患難時代にも続きます。ペテロが、五旬節の時に説教した時の事を思い出してください、ヨエルの預言を引用しましたが、こう書いてあります。「また、わたしは、上は天に不思議なわざを示し、下は地にしるしを示す。それは、血と火と立ち上る煙である。主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。(2:19-21)」太陽がやみとなり、月は血に変わる、というのは黙示録6章に出てきました。第六の封印が解かれた時です。そして、主の大いなる輝かしい日というのは、もちろん主が地上に再臨される時です。この情景はまぎれもなく、大患難であります。大患難においても、主の名を呼び求める人たちがおり、彼らも救われる、とあります。

さらにイエスさまが、オリーブ山で、世の終わりについて語られているとき、こう言われました。「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。(マタイ 24:14)」福音宣教は、教会が携挙されてからも続き、大患難時代の中でも続きます。黙示録 14 章を見ると、人ではなく、御使い自身が永遠の福音を携えて、あらゆる国民のところに行く、とあります(6 節)。患難期の後半には、獣の刻印を拒むものは全て殺されるからで、その 14 万 4 千人以外はみな死んでいるからです。だから宣教をする人間ではなく、御使いが伝えるのです。神は、ご自分の福音を人々に伝えるために、人間がいなければできないのではないのです。今の時代、主は、恵みによって救われたキリスト者を通して、人々をご自分に引き寄せられています。私たちがいなければ福音を伝えられないということではありません。

患難の時代でなくとも、この世において患難があることをイエス様は言われました。「あなたがたは、世にあっては患難があります。(ヨハネ 16:33)」イエス様が、福音が伝えられていく時には困難があり、そして患難を経て、世界中に伝えられていくという預言を行われました。「マタイ 24:9-14 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。また、そのときは、人々が大ぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」私たちにも、困難を見ます。そこで何をすべきか、ということは明白です。御国の福音を宣べ伝えることです。つい数日前に、エジプトで二つの教会でイスラム国によるテロ爆破がありました。そしてイスラム教は 2075 年までには、世界有数の宗教になると言われるまで急増しています。そしてシリアでは化学兵器による空爆を民間人に対して行ないました。近くでは、米国の海軍の艦艇が北朝鮮に近づいています。いろいろな不穏な動きが起こって、います。けれども、だからこそ私たちが、福音を伝えること、このことに忠実なことを覚えたいと思います。

そしてこの節には、「その衣を、小羊の血で洗って、白くしたのです。」とあります。先ほどの白い衣の意味がここに書かれています。白い衣は、キリストの血による罪の赦しであり、罪のきよめで

す。イザヤはこう預言しました。「『さあ、来たれ。論じ合おう。』と主は仰せられる。『たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。』(イザヤ 1:18)」キリストの血は、強調してもしすぎることはありません。ヘブル書 9 章 22 節には、「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」とあります。私たちが何か過ちを犯したときに、その過ち、あるいは罪を償おうとするのですが、行ないによって償おうとします。自分の心の罪意識を、なんとか償いたい、贖いたい、そして払拭したいと思うからです。けれどもそれでは、決して拭い去ることはできません。この罪意識のために、現代は多くの人々が精神的にいろいろな支障をきたしています。しかし、罪意識を拭い去るのは、血が流されることによってのみです。その罪の代償としての命が注ぎ出されなければいけないのです。そして、主イエス・キリストの血であれば、完全に私たちの心をきよめることができます。「まして、キリストが傷のないご自身を、とこしえの御霊によって神におささげになったその血は、どんなにか私たちの良心をきよめて死んだ行ないから離れさせ、生ける神に仕える者とするものでしょう。(ヘブル 9:14)」ですから、彼らは小羊の血によって、白くされました。

15 だから彼らは神の御座の前において、聖所で昼も夜も、神に仕えているのです。そして、御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです。16 彼らはもはや、飢えることもなく、渴くこともなく、太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません。17 なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。

天における安息と祝福がここに記されています。七つ、書かれています。第一に、主の間近に行けるという祝福です。「彼らは神の御座の前」にいるとあります。主に急接近するという、恵みにあずかります。第二に、奉仕において祝福があります。「聖所で昼も夜も、神に仕えているのです」とあります。天でありますから、夜があるわけではないのですが、ここは夜の時に眠らなければいけないような、疲れを感じることはないということです。私たちが奉仕をするというと、疲れるという思いがでできますが、天においてはありません。主に仕える喜びに満ちています。第三に、交わりの祝福があります。「御座に着いておられる方も、彼らの上に幕屋を張られるのです」とあります。幕屋というのは、親密さを示しています。イサクが亡き母サラの天幕に、リベカを入れたことが書かれていますが、そのように親しさの中に入ることを意味します。イエス様が人となられたのは、ひとえに私たちの間に幕屋を張られるためであることが、ヨハネ 1 章 14 節に書いてあります。

第四に、必要が満たされる祝福です。「飢えることもなく、渴くこともなく」とあります。彼らは患難の中で飢えて、渴きに襲われていましたが、もはやその苦しみはなくなります。第五に、安全の祝福です。「太陽もどんな炎熱も彼らを打つことはありません」とあります。イザヤ 49 章 10 節や、詩篇 121 篇 5-6 節にも、同じ約束がありますが、これは荒野の旅をしていたイスラエル人など、切実な問題でした。そして患難時代において、その後半で獣の住民が太陽の炎熱で焼かれていくとい

う災いがあります。今も、天候の不順でしばしば、太陽の炎熱の問題が世界で出てきていますが、それが格段に酷くなることでしょう。彼らはそれから守られます。そして第六に、導かれる祝福があります。「御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです」とあります。不案内によって、不安に陥ったり、迷うことはなくなくなります。詩篇 23 篇にある羊飼いとすの主、そしてヨハネ 10 章にある良き羊飼いいエス様の姿であります。そして、第七の祝福は、慰めの祝福です。「神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」とあります。

いかがでしょうか、このようにキリスト者にとっての慰めの約束が、患難時代の聖徒たちにも約束されています。地上においては殉教という苛酷な試練を通りましたが、天において慰めを受けます。ちょうど今日、日本にある唯一のコプト教会の指導者が、エジプトの教会で起こったことについて取材を受けている記事を読みました。このように言うておられます。「愛する家族がけがを負ったり命を落としたりした方々は今、とてつもない悲しみの中にあることと思う。父、母、夫、妻、息子、娘、愛する家族の誰かを失う痛みは計り知れない。しかし一方で、彼らが今、神の御座の前にいることに喜びを感じている。また、テロを行った実行犯に対して、彼らが創造主の存在を無視し、永遠の罪の中にいることに悲しみも感じている」。¹「いかがでしょうか、彼らが神の御前にあるということで、喜びを感じています。そしてテロの実行犯が永遠の罪、つまり聖なる神と小羊の怒りを身ながら、火と硫黄の中で永遠に苦しまなければいけないことも、悲しんでいます。これが、キリスト者の慰めであり、罪に対する私たちの悲しみです。怒りではなく悲しみ。しかし、天にある望みがあり、そこに喜びがあります。

¹ <http://www.christiantoday.co.jp/articles/23578/20170410/coptic-orthodox-church.htm>